

鎌倉楽しむ会

歴史講座

「歴史の遡り」

「足利尊氏のルーツを辿る」

鎌倉楽しむ会

清藤 孝 編

令和六年十一月二十日

歴史の遡り

古代の「東北」からの守り

古代より東北地方は「蝦夷」という呼称で、大和平城京からは、いわば治外法権の土地となっていたようでした。それを朝廷は、領国とし、「調」を取り立てるべきその傘下に収める行動は数々の試みがなされてきた。

一例として、創健が神武天皇の御代と言います「鹿島神宮」ですが、ご祭神は、国譲りで有名な「建御雷大神」で、二千八百年の歴史を刻んでいます。創建当初は「北の守り」として要塞基地であり、補給基地をも兼ねて鎮座されたと考えます。

また、香取神宮の創建に於いても、鹿島神宮と同じく、神武天皇期に鎮座されたと伝わります。ご祭神は「経津主大神」で、やはり神話の世界の国譲りの神です。こちらも創建当初は軍事基地あるいは補給基地も兼ねて鎮座されたと考えられます。現在の本殿は南方ですが、奥の院は北向きであり、創建当初の思想

が残っていると思われます。

大化の改新・乙支の変

大化元年（645）大化の改新・乙支の変が歴史上に記録されているのは、中大兄皇子と中臣鎌足による天皇家を超える勢いの「蘇我入鹿」を葬り、天皇家に権力と権威を確立していく。

その後、しばらくは国家建設を確固たる姿にするべく尽力し、そして、中大兄皇子から第38代天智天皇を践祚していきます。

また、中臣鎌足は、藤原姓を賜り二代目の藤原不比等の代から天皇家と深くつながり、その子孫は代々繁栄し続け、日本の国家形成の基盤を作りあげていく。

ヤマト政権の防備体制

天智天皇は、中国唐の制度を見習った律令体制を確立させ、その制度を活用した政権運営をするヤマト政権としていった

。そして、朝鮮半島の交易を盛んにすると

同時に最新の文化やいろいろな技術の導入を計っていた。しかし、その勢いをもって、朝鮮半島の内乱に介入し、白村江の戦（663）では、ヤマト政権の存亡をも揺るがす大敗を喫してしまふ。急遽、中国・唐と高句麗連合軍の来襲に備え「大宰府」を南の守と固めていく。幸いにして、中国・唐の政権も弱まりつつあり、やがて宋の国と政権は代わっていく。しかし、ヤマト政権の安定には、海外からの防備が重要であり、瀬戸内海の整備も固めていく。

同時に「北」に目を転じ、本格的に蝦夷の地の防備と支配する目的のための軍事拠点として「多賀城」の建設が神亀元年（724）に始まった。建設人は、按察使・大野東人が築城したとされている。

平時には東国を治める国府（役所）の機能も有るようになる。

大仏開眼と道鏡

第45代聖武天皇（730）の発願による「大仏開眼供養」が盛大に、第46代孝謙天皇の天平勝宝四年（752）の御代に行われた。

孝謙天皇は女帝であるが、天平宝字二年（758）上皇となり、淳仁天皇を第④代天皇に践祚した。

その後孝謙上皇は病み上がりとなり、祈祷師である「道鏡」の看病を受けることになった。そして、日増しに「道鏡」を重用していった。

それに乗じた道鏡の勢いは止まらず、弓削道鏡の一族も勢力を伸ばしてきた。

これに危機を感じた淳仁天皇と藤原仲麻呂は上皇を諫めたのですが、上皇の逆鱗に触れ、淳仁天皇は退位に追い込まれてしまう。

そして、孝謙上皇は、再び④代「称徳天皇」として践祚し君臨していきます。

称徳天皇は、益々道鏡を寵愛します。ついに道鏡は「法王」の御位となり、さらには称徳天皇の影響もあるのか、天皇の御位をも篡奪するようになってきた。

朝廷は、これに対し危機感が募り、急遽「和気清麻呂」を宇佐八幡宮に遣わし、道鏡を排除の「神託」を得てくる（769・三月）。この「神託」が因をなしたのか、元来病弱な称徳天皇は翌年の宝亀元年（770・八月）崩御されていく。

後ろ盾を失った道鏡は、急速にその勢いは薄れ、ついに東北は下野国石橋の「薬師寺」に称徳天皇崩御後、時を経ずして配流されてしまう。

この事変から検証してみるに、当時の日本に於ける戒壇院（僧侶の資格を允許する所）は、東大寺（奈良）、観世音寺（大宰府）と薬師寺（下野国）の三ヶ寺だけであったが、現在の関東地方は、既にヤマト政権が支配しているということが確認できるのです。

蝦夷地の支配へ

天応元年（781）践祚された、第⑤代桓武天皇は、蝦夷を領国とすべき行動が積極的となってきた。

延暦七年（788）には「紀古佐美」を征東大使と任命し、二万の大軍を多賀城に派遣し蝦夷地制覇のため、多賀城に向かわせた。

しかし、縄文時代より結束に堅い蝦夷の族長「アテルイ」により壊滅的打撃を被ってしまい、蝦夷地の征服は完全に失敗に終わってしまうのです。

坂上田村麻呂の登場

延暦十三年（794）桓武天皇は、平安京に遷都を行い、平安時代の始まりとなった。

ここで、再度、蝦夷地攻略のため「坂上田村麻呂」を起用し、延暦十六年（797）「征夷大將軍」に任命し、多賀城に派遣されるのです。

坂上田村麻呂の取った作戦は、戦いは次にして、蝦夷地の俘囚たちの慰撫を最優先にした統治戦略を始めた。

そして、多賀城より奥深くに（現在の一関あたり）に、規模の大きな「胆沢城」の建設に入った。この様子を偵察していたと思われる族長の「アテルイ」と「イワグノモレ」は坂上田村麻呂に帰順してきた。

坂上田村麻呂は帰順した「アテルイ」「イワグノモレ」の二名の族長を従えて京の都に凱旋した。田村麻呂は、この両名に蝦夷地の管理を任せる構想を持っていたが、公家社会の理解は得られず、族長二名は憐れ、斬首されてしまいます。その亡骸は想像ではありますが、延暦十七年（798）坂上田村麻呂により創建

されたという京は東山・清水寺に安らかに眠

っているかもしれません。現在はこの族長二名の供養碑が清水寺境内には、静かに建立されています。

坂上田村麻呂に平定された蝦夷地は「陸奥国」となり、京の都より、「多賀城」へ「鎮守府將軍」が任命され赴任し、税の徴収などの管理に当たって平和に過ごしていた。

そして、蝦夷地の有力俘囚や都より派遣された下級貴族などが国司などに叙任され下向し蝦夷地からの「調」を都に治める役割を担っていく。

平将門の乱

九世紀以降、関東に於いては中央から赴任してきた国司がその任地に土着する傾向が目立ってきた。その代表的なのは、桓武天皇の曾孫である平高望に始まる桓武平氏である。

将門は、鎮守府將軍良将の子で高望の孫にあたる。承平五年（935）、将門は、その一族と紛争を起し、伯父の国香らを殺害してしまう。これが、以後六ヶ年にわたる平将門の

乱の始まりである。

このように、将門の乱は、当初は同族どうしの私闘的な性格のものであったが、後に、足立郡司武蔵武芝と武蔵権守興世王・武蔵介源経基との紛争に将門が介入したことを契機に、大規模な反乱となり、将門自身朝廷に敵対するようになっていく。

一ことの発端は、興世王と源経基が強引に安達郡内を巡検しようとしたのに対して、武蔵武芝が、これを拒否したことに始まる。将門は、この紛争を調停するために事件に介入するが、その試みは失敗に終わってしまう。しかも、源経基が将門の真意を疑い、将門謀反の旨を朝廷に訴えたために、将門は朝敵として追討を受ける立場に陥ってしまうのです。

一方、当初は将門と対立していた興世王も、新任の国司百済貞連との対立が深まり、やがて将門のもとに身を寄せることとなった。

そして、天慶二年（932）九月、今度は常陸国の紛争に介入した将門は、ついに常陸国府を攻めて国印と国衙倉庫の鍵を奪い、以後、上野・下野両国の国府を襲撃した。将門は自ら「新皇」と名乗り、関東に新政権の樹立を図

ろうとしたのです。

この将門の反乱の知らせは直ちに京都に達したが、朝廷には自らこの乱を鎮圧する力がなかった。天慶三年（933）、藤原忠文が征夷大將軍に任命されたが、実際は将門追討のために活躍したのは、将門に殺された平国香の子・貞盛と下野押領使・藤原秀郷といった、将門と同じ関東の土豪たちであった。

天慶三年二月、彼らはいかに将門を討ち取り、平将門の乱は鎮圧された。

古代国家の地方支配をゆるがせた平将門の乱が、このように関東の土豪の手によって鎮圧されたことは、朝廷に対して関東の兵たちの実力を大いに示すこととなったのです。

平忠常の乱

（長元元年（1028）～同四年（1031））

平忠常は、房総・武蔵地方に大きな勢力を振るい、上総介を退任した後も、房総の地に割拠していた。忠常は万寿四年（1027）ごろから猛威を振るって坂東の受領を圧迫し、安房国衙を攻撃し、安房国衙をも襲って国守を焼

き殺したとある。

「この年の六月、忠常反乱の報に接した朝廷は、検非違使の平直方を追討使に任命した。しかし、直方追討使は忠常を討つことができず、追討使を解任されてしまう。

これに代わって長元三年(1030)に追討使に任命されたのが、甲斐守・源頼信であった。頼信は地道に和平交渉を図った結果、同年四月、忠常は頼信に投降した。頼信はこれを赦し、忠常を伴い京の都に向かったが、途中の美濃国で忠常は病死したため、この首を持って京都に入った。

このように、四年間にわたった平忠常の乱はあつてなく幕を降ろした。この乱の結果、中央の貴族政権の弱体化が表面化する反面、源頼信と同行した嫡子・源頼義の武名は一層の高まりをみせた。

さらに前追討使の平直方は、頼義を娘の婿に迎え入れ鎌倉の館と武蔵国の配下の武將を譲り、ここで、東国における源氏発展の基礎が築かれていくのです。

前九年の役

平安時代の中期以降、陸奥国においては「俘囚の長」と呼ばれる在地豪族が抬頭してきた。その中でも勢力を振るったのが安部氏である。そして、十一世紀に入ると、安部氏は国司の命令にも従わなくなり、その勢力を陸奥六郷以南にも伸ばしはじめた。

永承六年(1051)、陸奥国において安部頼時が反乱を起こす。

そこで、朝廷より派遣されている陸奥守・藤原登任を追討使して大軍を派遣し、安部氏を攻めたが、大敗を喫してしまう。

「この事件を重大視した朝廷は、平忠常の乱を鎮め、関東で声望の高い源頼義・義家父子を派遣し、安部氏の討伐を任命した。このため、安部氏は一時頼義に帰順したが、後に再び乱を起こし、頼義・義家軍は苦戦を強いられた。しかし、康平五年(1062)、出羽国の俘囚の長である清原氏の協力を得た頼義・義家父子は、ついにこの乱を平定した。これが「前九年の役」である。

「この乱には、源頼義・義家父子とともに多くの関東武士たちが出陣しており、頼義・義家

父子は坂東武士団の組織と棟梁権を、この乱⁴を機会にしっかりと確立していくのです。

後三年の役

前九年の役を平定した源頼義・義家父子は、出羽の俘囚「清原氏」を陸奥六郷の領主も継承することを朝廷から認められます。

その後二十年の間に、清原家の当主が治めますが、清原家の内紛が熾り続けていました。そこへ、永保三年(1083)秋に、源義家が朝廷より、陸奥守に任じられ多賀城に入ります。

それと時機を同じくして、清原家は当主「真衡」と叔父の「吉彦秀武」との諍いが起こり、源義家の仲裁にて、清原清衡と父違いの家衡兄弟に出羽国と陸奥六郷の地を分配した。

しかし、この分配に不満を募らせた家衡は清衡の館を攻め焼打ちしてしまう。これに対し清衡は源義家の助けを求め、家衡一族を壊滅します。そして、清原から父の名代をいただき「藤原清衡」を名乗り、奥州(出羽国・陸奥六郷)の支配者藤原王国の祖となるのです。

保元の乱

後三年の役で、関東東北の棟梁の権力を深めた「源氏」は朝廷の東国支配にはなくてはならない存在となつて行きます。

この時の棟梁は「源義朝」で、鳥羽天皇の近臣として活躍、正妻には熱田神宮大宮司の娘「由良御前」を娶り頼朝を含め三人の男子に恵まれ、その後、九条院の雑仕女・常磐御前を側室とし義経を含め三人の男子を得ています。

時は、朝廷内では、皇位継承問題が暗闘し、鳥羽法皇は崇徳上皇の系統には継承しないという構図ができていた。

そして鳥羽法皇が崩御しますと、崇徳上皇の近臣は、義朝の父・為時、弟・為朝などを擁し武力でクーデターを起こし、皇位継承を画策する。

一方、鳥羽法皇亡き後の美福門院たちの近臣は、平清盛、源義朝などの武門に頼り、暫定的天皇として、「後白河」を擁立することが表面化した。保元元年(1156)七月のことである。

争いの結果は、清盛・義朝の武力を頼みにした「後白河天皇」の勝利。敗れた為義は斬首、

為朝は腕の腱を斬られ伊豆大島に流され、さらに崇徳上皇は讃岐にと流されていきます。

この保元の乱にては、益々武士という権力が表面化してきます。

平治の乱

保元の乱(1156)が鎮まったと思いきや

約一三〇年前に起きた「後三年の役」の現象が起きます。保元の乱のわずか三年後(1159)の十二月です。これが後の世に「平治の乱」と呼ばれる戦いなのです。

それは、権力では天皇家を凌駕した「平清盛」と「源義朝」の雌雄の決戦なのです。時の知謀者「信西」により、保元の乱における清盛への恩賞が莫大であったと伝わる。

その他諸々の事由があるが、平清盛の「熊野詣で」の留守を狙い、源義朝と公卿の藤原信頼が、後白河上皇・二条天皇を内裏に押止め、一時的に天下を治めます。

急遽、六波羅に帰郷した清盛は、上皇と天皇を奪還し、義朝・信頼軍を武力で圧倒してしまう。義朝敗走し部下の裏切りで敗死。そ

の時、初陣を飾った「源頼朝」は捕まり、命乞いで翌年伊豆へ配流。

ここからの二十年間は「平家」にあらずんば人にあらず」と平家の栄華が続くのです。

鎌倉幕府の成立

源頼朝十四才で伊豆「蛭ヶ小島」に配流されるが、比較的自由な行動が許され、北条政子とも結ばれ幸せな生活ができていたと考えられる。

そこへ、俄かに風雲急を告げる「以仁王」からの「平家打倒」を呼びかける令旨が、国中の源氏に行き渡る。頼朝は襟を正して、その令旨を受け取る。伊豆へ流され二十年の歳月を経た三十四才のときであった。

速足で土佐に配流されている弟・希義の平家による誅殺も伝わってくる。同じく伊豆に配流されている「文覚上人」の呪力も加わり、また、関東奥羽の棟梁の権力を築いた先祖・義家、父・義朝の隠然たる恩顧のある関東武士の力もあり、治承四年(1180)八月「平家打倒」に心は猛然と立ち上がるのです。

その「平家打倒」にいち早く鎌倉に馳せ参じた武将の中にはしっかりと「**足利義兼**」も加わっていた。

翌治承五年(1181)二月清盛は病に倒れ「我が墓前に 頼朝の首を供えよ!」と遺言し、壮絶な死を迎えた。そこから、戦いの潮目は、頼朝に流れ、源氏は「義経」などの活躍もあり、ついには寿永四年(1185)三月、壇ノ浦の決戦にて平氏は壊滅し、ここから源氏三代と北条執権時代が一五〇年間続くのです。

承久の乱

源氏三代が途絶えた時に幕府存続の危険が訪れる。二代將軍源実朝に後継者の気配がなく。母・政子は京の都に赴き、時の天皇・後鳥羽天皇へ拝謁し、「親王」を拝戴し、武門による鎌倉幕府の存続を願い出る。政子は確約を得られぬが良き感触を持って鎌倉に帰ってきた。

それから間もなく、怒髪天を衝く天下を揺るがす大事件が起こる。雪の積もる建保七年(1219)一月二十七日、三代將軍実朝の右大

臣拝賀式での暗殺である。

これを契機に、後鳥羽天皇は太上天皇となり朝廷に政権を取り戻す画策を廻らす。まず、北条政子との約束事はやんわりと拒否していく。そして土御門天皇を上皇とし、利発な順徳天皇と打倒鎌倉幕府の画策を行う。

この時の鎌倉幕府は二代執権義時が政務の頂点にいた。天皇家への攻勢には迷いがあったが、大江広元等の進言があり、承久三年(1221)五月、京の都に三代執権となる「北条泰時」を走らせ、十九万騎の大軍に膨れ上がった幕府軍に圧倒され、後鳥羽太上天皇は隠岐の島、土御門上皇は土佐、順徳天皇は佐渡に流されていく。

ここから、北条得宗家が鎌倉幕府の執権職を一一〇年間。さらにライバルを排除しながら続けていくのです。

鎌倉幕府の「足利家」

鎌倉幕府創立の一番の功労者としての「上総介広常」の抹殺や、源氏の血筋に近い甲斐武田、甲斐安田等の退場、時政が二代將軍頼家

の時は、頼朝の流人時代二十年間食料を送り続けた「比企家」を頼家の側室若狭局とその嫡子・一幡共々殺戮してしまつた。

また、梶原景時の弾劾、初代時政の時、畠山重忠の謀殺、二代義時の時には和田義盛の合戦抹殺、五代時頼のときは三浦一族壊滅、九代貞時は、頼朝時代からの御家人安達家の滅亡。など数々の粛清の修羅場を通り抜け、存続し続けた「足利家」の物語を探索し少しでも、その生きざまに触れることができるかもしれないと、足利家が建立した「浄妙寺」「竹の寺」「報国寺」、「長寿寺」「浄光明寺」などを巡り歴史と文化の風をいただこうと思っています。

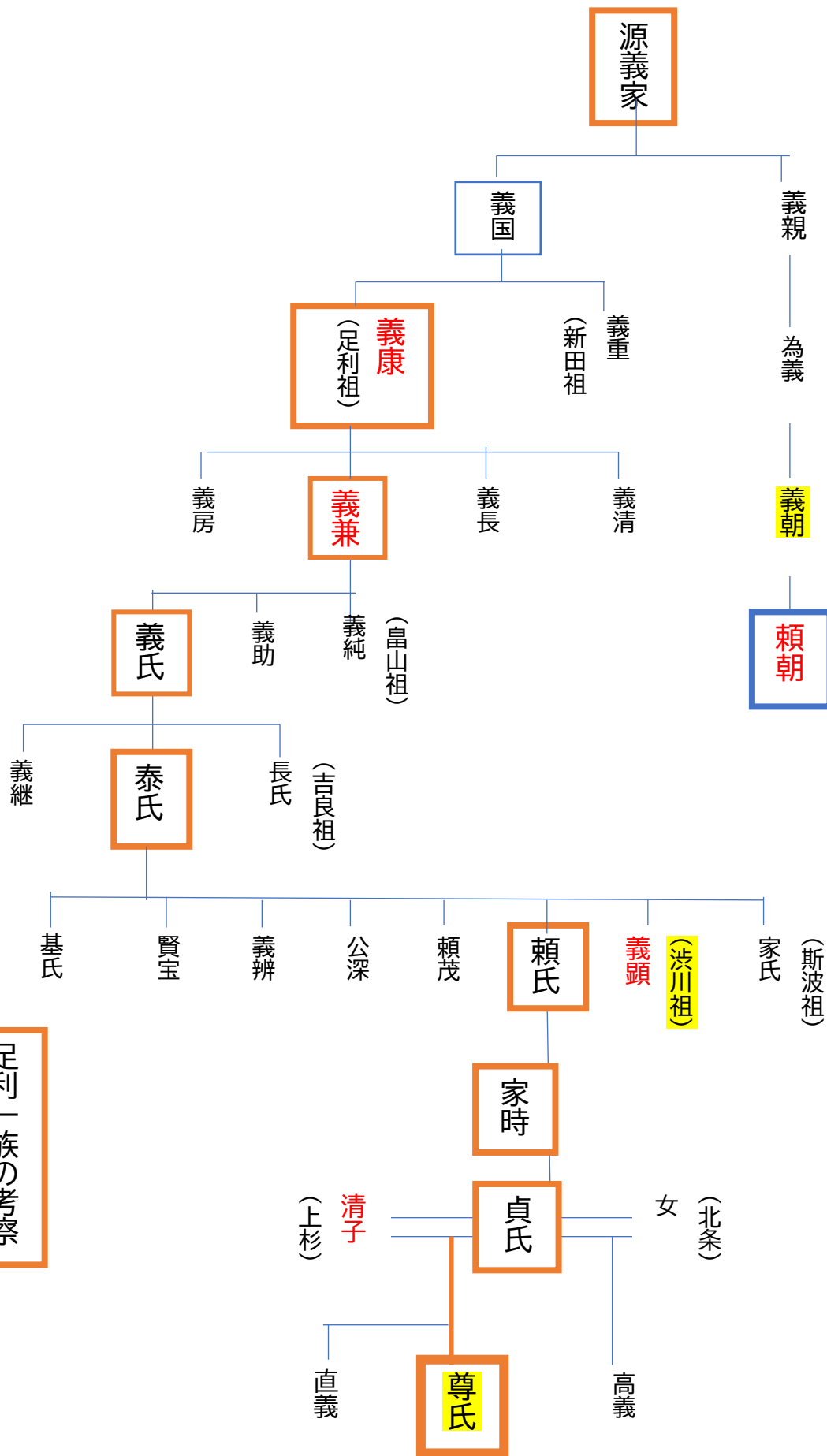
源頼朝の鎌倉幕府創立の時の大貢献者「足利義兼」から始まる「足利家」は北条得宗執権と姻戚関係を結び、その時々の時流にうまく乗り逆らわず目立つことなく、源義家から始まる名門として淡々と機会到来の時には天下に狙いを！定めていたのではないだろうか。

第十六代執権北条守時の妹・登子は足利尊氏の正室で、室町幕府二代將軍足利義詮の母になります。

休憩

足利家の系図

源義家
ゝ
足利尊氏まで



足利一族の考察

足利一族の考察

足利の名代誕生

平安時代中期から後期にかけ、房総から奥羽地方の争乱を鎮め、黄金の国と称される「奥州藤原王国」の創建にも多大な協力し武門の頂点となった河内源氏の三代目棟梁・源義家は、白河天皇の行幸の際には重要な護衛の任を担い、院昇殿もゆるされるようになる。

また、摂関家より荘園の守護を任され、その一つに上野国八幡荘があり、それを嫡男・源義国が父義家の代理として守護してきた。

そして、利発な義国は、その周辺の開発も行い、開発した土地を安楽寿院（鳥羽天皇が建てた寺）に寄進した。これを鳥羽院は八条内親王の所領とし、ここを「**足利荘**」と命名したのです。

その源義国も在京軍事貴族と鳥羽院に近侍して活躍していたのですが、「足利荘」は次男の「源義康」に任せることとし、そして守護職の任を命ずるのです。そして「足利荘」を任された義康も都で活躍していたが、守護し伝領した「足利荘」（栃木県足利市）を「**本貫**」とし、

「源」から「足利」を名乗り、所領を鳥羽天皇への寄進が機縁となつて、上皇となられた鳥羽上皇の北面武士として「**足利義康**」と名乗り仕えていくのです。ここに「**足利家初代**」が誕生するのです。

また、義康は、熱田神宮大宮司の藤原季範の孫を娶り、同じ大宮司の娘「由良御前」を娶った河内源氏の同族「源義親（源頼朝の父）」とは縁戚関係になるのです。

そして、義康の妻も鳥羽上皇の后・美福門院の女房として仕えていったのです。このように足利義康は、源氏の一門として検非違使に任官し、陸奥守にも任じられ、鳥羽院の崩御後に起こる天皇家の皇位争いの「**保元の乱**」では、平清盛・源義朝軍に次ぐ百余騎を率い主力の部隊とし出陣した。戦勝後の論功行賞は蔵人になり、昇殿も許された。さらに、従五位下となり、貴族に列していく。また、長男の義清・次男義長らも北面の武士や八条院などの女院に仕える武士として活躍していく。

足利二代義兼

その一方、三男の「義兼」は兄たちとは別行動を取り、「足利荘」に帰任し土着しているのです。

治承四年（1180）、伊豆地方で源頼朝が平氏打倒の旗を掲げるや、いち早く馳せ参じ、その陣営に加わり、頼朝に近侍し大きな信頼を受け、鎌倉幕府創立に活躍していくのです。その背景には、義兼の母が熱田大宮司季範の孫娘であり、頼朝の母の姪にあたるという関係にもあつたようです。

頼朝は挙兵間もなく、味方の親族も乏しく、源氏に繋がる義兼の参陣は心強い事であつたろうと思われる。養和元年（1181）二月には、頼朝の取りなしで、頼朝の妻北条政子の妹・時子を妻として迎える。こうした事実からも挙兵直後の頼朝が義兼という存在に対して最大限の配慮を行っていたことがうかがえる。

平家討伐の戦いでは、寿永三年（1184）二月には、一ノ谷合戦に参陣、同五月には木曾義仲の嫡子義高の残党討伐のために甲斐に出陣、八月には源頼範に従い平氏討伐のため西海へ出陣と、めまぐるしい活躍をする。

しかし、京都にいた兄義清・義長は政争に

巻き込まれ、最後は木曾義仲軍に身を投じて戦死してしまう。

平氏滅亡後の恩賞として文治元年(1185)八月には、義兼は頼朝が知行国主を務める上総の介(次官)に任じられる。その後、義兼は、文治五年(1189)、頼朝の奥州藤原氏討伐軍にも加わり戦功をあげる。

しかし、幕府内での高い地位を与えられていた義兼であったが、建久六年(1195)三月、頼朝が東大寺の落慶供養のため上洛したとき、これに随行し、そのまま東大寺で突然の出家をとげてしまったという。その後天王寺参詣の随行もみられるが、この記事を最後に「吾妻鏡」から義兼の名前は消えてしまう。

義兼の出家の背景

義兼の突然の出家はなぜだったのか。当時義兼はまだ四十二才であり、嫡子・義氏はまだ七才。この急な出家の動機は、義兼が武将として百戦錬磨の豪放な反面、足利の館には仏所を設け、来世に心を寄せる宗教心の篤い人物でもあったことにあると思われるのです。

後々のこととはなりますが、この足利の館の仏所は、義兼亡き後、嫡子義氏により義兼の法名「鏝阿」を拝戴し「鏝阿寺」となっていくのです。

しかし、それ以外にも、政治的に深刻な想いがあつたのではなからうか。後の足利一門の「今川了俊」は「難太平記」のなかで、次のように書いているという。

「義兼は、頼朝公とくくに親しくなさつたので、さらに世間を憚つて『空物狂い』となつて、狂人のふりをして一代のうちは無事にお過ごしになられた。そのため義兼は「わたしの子孫には、しばらく我が霊がとりついて正気を失うことがあるだろう」と預言なさつたと伝えられている」

事実、元暦元年(1184)頃から頼朝は、自分と同じ源氏一門を御家人と同列に位置づけることを志向しはじめ、それに従わない甲斐源氏の武田氏、信濃源氏の大内氏に対して厳しい統制や粛清を行っている。挙兵当初とは豹変するがごとく、頼朝は源氏一門でも御家人と同列に扱い、それに反する者は容赦なく排除していくのです。

義兼は、このような頼朝の変貌を見るにつけ、「**次は自分かもしれない**」との不安を抱きはじめたのではないだろうか。そこで、義兼は自身の信仰心を顕わにし、頼朝の執拗な行動から逃れるための、高度な政治判断を下したものと思われるのです。

出家後の義兼は足利の樺崎寺に四年の歳月を隠棲し、建久十年(1199)三月死去していく。奇しくも頼朝の死のわずか二か月のことであつた。

足利三代義氏の時代

父・義兼の死により、家督を継承した嫡子・義氏は、わずか十一才であつた。しかし、義氏の母は、頼朝の幹旋により北条政子の妹・時子であり、政子とは甥と伯母の關係となつていたので、義氏は、頼朝に代わつて幕府の実権を握つていく執権北条家の一門として活躍していくこととなります。元久二年(1205)には、北条時政の陰謀による「畠山重忠」の討伐軍に名を連ねている。十七才の時であつた。

また、北条義時と和田義盛が幕府の主導権

をめぐって争った建暦三年(1213)五月の和田合戦では、北条方となった義氏は、和田方の勇猛で知られる朝比奈義秀と壮絶な戦いを繰り広げ、北条軍を優勢に導き、和田合戦の勝利に貢献しています。

このような功績が認められ、建保三年(1215)には、北条泰時の娘を妻に迎えることとなります。これにより、足利家は義兼・義氏と二代にわたり北条氏の娘を妻に迎えることとなります。

建保五年(1217)には武蔵守を叙任、貞応元年(1222)には陸奥守になるなど、北条執権の中でも重要な地位を与えられる。

承久三年(1221)、後鳥羽天皇による鎌倉幕府の倒幕行動に対し、泰時に従って京に攻め上り、京都を制圧し、鎌倉幕府の存在を確固たるものに貢献していく

宝治元年(1247)の宝治合戦では、五代執権・北条時頼に加勢し、幕府創立以来の雄・三浦氏を滅亡に追い込みます。これにより、義氏の足利家は上総・三河二カ国の守護職を有し、幕府内でも北条氏の重鎮となったのです。

さらに、嫡子・泰氏の妻に三代執権・泰時の

孫娘を迎えるなど、北条氏の蜜月は続けられていった。ただし、その一方で、これまでの足利家の当主が「義」という清和源氏の通字が伝統であったが、嫡子・泰氏の代からは、その名前の「義」が消えて、その代わり執権北条氏の泰時の「泰」や、時頼の「頼」の字をもらい受けるようになる。このことは、確実に北条執権を頂点とする鎌倉幕府の権力機構にとりこまれて、北条家の風下に立たされて行くこととなります。このように幕府内での北条家との絆は固く結ばれていくのであります。

足利家四代泰氏の時代

父・義氏が北条家の風下に立ちながら、足利家の繁栄を勝ち取ってきたのですが、ここで、足利家に衝撃が走る事件が起こる。

それは泰氏が、建長三年(1251)十二月、頭を丸め、出家してしまうのです。当時、幕府の許可を得ないで勝手に出家することは「自由出家」と呼ばれ、重大な背信行為とみなされていた。それを三十六才の泰氏が侵してしまうのです。

幕府はこれを赦さず、罰として上総は没収¹し、泰氏は中央政界から追放され、ここから本領の足利荘で余生を過ごすことになります。しかし、何故、泰氏は御家人で思慮深い年齢でありながら、衝撃的に自由出家をしたのであろうか。これには、やはり政変の動きが関連しているようです。

泰氏の出家から、日を待たずして、摂家将軍藤原頼経・頼嗣父子が、五代執権時頼により、鎌倉を追われ、かわりに新たな「宗尊親王」が將軍として下向してくるのです。

これは三代將軍「実朝」の亡き後に迎えた「藤原九条兼実」の孫・三寅が成人し、四代將軍藤原頼経となり、その皇子頼嗣と、宝治合戦(1247)で敗れた三浦一族とが合体し、北条得宗家の壊滅を計る大規模なクーデターであつたとして伝わる。

このクーデターは未遂に終わりましたが、足利泰氏は、これに対し何らかの関与があり、北条家討滅計画の漏洩の情報をいち早く察知し、身の危険から逃れた出家という、政治的判断の行動ではなかったのではなからうかと考えられる。

この事件を境にして、足利家の繁栄も北条得宗家から外され、泰氏の嫡子・頼氏の妻室は北条氏の支族である**佐介氏**から迎えられることになりました。

足利五代頼氏の時代

突然の家督継承は十一才の時であつた。幼少であつたため数年間は幕府での活動は見られないが、成人するにつれ活動は少しはみられ、「吾妻鏡」に、五代執権北条時頼の長男・宝寿(のちの北条時輔)の元服の際には、その烏帽子親を務めたと記されている位である。

生来病弱であつたのであろうか。弘長元年(1261)七月には鶴岡八幡宮放生会への將軍社参の供奉には病気を理由に辞退している。享年は、嫡子・家時に家督を譲り、まだ、二十才であつたという。

足利六代家時の時代

父頼氏の早逝により、足利家の家督は嫡子・家時が弘長三年(1263)二十才で継承する。

これまで、義氏・泰氏・頼氏と足利家歴代当主の母は北条家出身である。ところが、家時の母は上杉重房の娘であつた。これは、父頼氏の正室(佐介時盛娘)との間に子息ができず、足利家に仕える侍女身分の上杉家の娘であつたのである。

この頃の幕府は八代執権時宗で、モンゴルの来襲で、国内は騒然としており、この侵略に対応すべく、北条得宗家は御家人の統制を強化していった。しかし、二度の来襲を撃退した時宗は心労のためか、弘安七年(1226)四月に三十才の若さで死去してしまう。

時宗亡き後、何故か九代目執権が決まらず、二か月を経た同年六月には、京都の六波羅探題で「南方長官」を務めていた北条氏一門の佐介時国が「悪行」を理由に鎌倉へ召喚され、十月には常陸で誅殺されている。この事件は、北条得宗家と佐竹氏との間に暗闘があつたのか、時宗の嫡子・貞時は時宗の死去から三ヶ月が経過した七月に至つて、ようやく執権の座に就いているのです。

家時の自刃は、北条得宗家が佐介氏が鎌倉へ召喚され、拷問の大弾圧をかけ排除の行動

をしている最中の六月、二十五才というこれからという年齢であつた。

この事件も憶測するに、家時の父は、正室が佐介時盛の娘であつたことが、家時と佐介氏との間に何らかの密約があり、これら情報が幕府に漏れ、このことが家時の命を奪つたのかもしれない。

また、蛇足として、今川了俊の「難太平記」によれば、「足利家には家祖・源義家が残した置き文が伝えられており、そこには『七代目の孫にわたしは生まれ変わり天下を取る』という不思議な予言が記されていた。家時は丁度、その七代目に当たっていたが、その頃、北条氏の天下は安泰で、まだとてもその機は熟していなかった。そこで、家時は八幡大菩薩に「**わたしの命を縮めて、そのかわりに三代のうち****に天下を取らせてください**」と祈念し、切腹して果てたという。」

「難太平記」を書いた今川了俊によれば、そのときの家時の自筆の置き文は、了俊の生きた時代まで足利家に伝えられており、尊氏・直義兄弟の前で了俊と、了俊の父、今川範国も実見たという。

また、歴代の足利家当主は本領である足利荘に、密教思想を基礎(真言宗系)とする浄土庭園を営む菩提寺を構えていたが、家時は、ほとんど足利荘には足を踏み入れることなく家時の菩提寺は鎌倉で“竹の寺”として有名な「報国寺」を創立したのであります。

宗派は禅宗であり、家時の時代となった足利氏は鎌倉の地を「本貫」とし、宗教的文化面でも、それ以前の当主たちとは大きく飛躍した姿になっていく変化の兆しが生まれてきたのではないかと思います。

足利七代貞氏の時代

数々の政変の渦の中に追いつまれ自害した父・家時の後を継いだのは十二才の幼年「貞氏」であった。時代は北条得宗家による幕府権力への集中が顕著になり、その権力を脅かす者への猜疑心は益々強くなっていきます。

その大きな事件は、弘安八年(1285)十一月十七日、源頼朝が伊豆の流人時代から近侍してきた「安達家」が、北条得宗家の内管領・平頼綱によって肅清されていく。この時足利

一族のなかにも安達派として討たれた者が出ているという。これにより、北条得宗家の執権としての権力は益々肥大化し、鎌倉幕府創立に貢献した御家人達は滅ぼされ、源氏の同族も「足利家」を除いて殆ど肅清されていく。

貞氏は、家宰の高氏や上杉氏による支援を得ているが、幼年の身には非常に厳しい足利家の存続を強いられることとなります。

幸いにも、全国に多くの所領をもち家計を支えるものがあつたが、北条得宗家の行事には家格に見合う多額の出費を要求され、北条得宗家に対する関係維持には非常に気を使わなければならず、一歩間違えば、足利家の存続も危ぶまれることとなってきた。

また忍従の日々が続くことにより、時々、先祖・義兼の遺言「物狂い」の精神異常に陥ることもあつたようです。一方、北条家との関係から、正妻としては金沢北条頼時の娘を娶り、嫡子高義が永仁五年(1297)に生まれている。また、側室の上杉清子とは、高氏(後の尊氏)が嘉元三年(1305)に生まれ、弟・高国(後の直義)は、その二年後に誕生していた。

このままで行けば、足利家の家督は長男の

高義に継承されるのですが、しかし、高義は³文保三年(1317)二十一才の若さで亡くなってしまうのです。

ここから俄かに、次男の尊氏の存在が大きく浮かび上がってきます。しかし、この時点での尊氏は、まだ十三才の幼年であつたが、この兄高義の死は足利家と北条家との血縁が途絶えてしまうことになるのです。

父の貞氏は、北条得宗家の忍従に堪えながらも、当主を務め、鎌倉の浄妙寺の再興や本領の足利の「**鏝阿寺**」が落雷で焼失したものを、正応五年(1292)から七年の歳月をかけ再興し、宗教心の篤い足利家の伝統はしっかりと継承しているのです

足利家 八代「尊氏」の誕生

ここで、尊氏を足利家の家督とする最大の壁は、なんといっても北条氏との血縁がないということになりました。代々足利家の当主は、北条一族の娘を正室として迎えていたため、歴代の当主の殆どは北条一族を外戚とすることとなっていた。

しかし、尊氏元服の後も家督の継承は、尊氏の出生が北条家以外の妾腹であったことから、足利家の後継者継承は北条得宗家の許しを得ることはできません。

そこで、家宰の高氏や上杉氏が活躍します。時間がかりましたが、先々の十六代執権となる北条一族の名門「赤橋守時」の妹・「登子」を尊氏の正室に迎えることになり、ここで尊氏の血統上の弱点は補われ、家督継承は、ハッキリと確固たるものになっていくのです。

そして元徳二年（1330）には、尊氏二十六才のとき妻登子との間に第一子の「義詮」が誕生することになります。

この時、幕府は大きな転換期を迎えています。モンゴル襲来の文永の役（1274）、弘安の役（1281）により幕府の財政は非常に困難に陥っていきます。また、戦役による御家人へ恩賞もままならず、御家人達の財政も深刻な困難となつていきます。そして、幕府への忠誠心も低下していきます。静かに幕府は疲弊し、いつ倒幕の機運が発生してもおかしくない時流となつてきました。

実際に京では、後醍醐天皇による倒幕計画

が密談されていたが、それが鎌倉幕府に密告され（正中の変＝元享四年＝1324）、後醍醐天皇側近への執拗な調査の結果、公卿の日野資朝が佐渡国へ遠流だけの、一応の決着となつた。しかし時代は益々倒幕の暗雲が立ち昇つてきた。

このような、西国から不穏な情勢が伝わってくるなかで、そして、孫・義詮の誕生を待っていたかのように父・貞氏は、元弘元年（1331）九月五日死去していきます。

五十九才の足利家当主として北条得宗家への配慮に苦慮し、物狂いの精神異常を演じながらの生涯ではなかったかと思われるのです。

足利家 八代「尊氏」の誕生

ついに尊氏が二十七才で正式に足利家第八代当主を継承していくのです。

しかし、この貞氏の死去に際して、北条得宗家は、その仏事を許さず、無情にも足利家に対し西国動乱（鎌倉幕府の倒幕）の鎮圧のための出陣を命じてくるのです。屈従を強いら

れてきた貞氏に対する、新当主の足利尊氏の⁴想いはいかばかりであつたらうか。

その足利尊氏が、鎌倉幕府に叛旗を翻すのは、これよりわずか二年後のこととなります。

ここまでの足利家の足取りは、三河源氏の源頼朝の平家打倒にいち早く参じた足利義兼は、鎌倉幕府成立の貢献に多大な力を発揮し幕府の重要な幕閣を担うようになった。

しかし、その資格の高さが、幕府内でも危険視されることを察知したのか、頼朝に仕えた「足利義兼」は突然の出家をし、本貫地の足利荘に隠棲してしまふ。遺言は「**血書**」をもつて子孫の行末を守ることを書き印し残しているという。

源氏将軍が絶え、北条得宗家の陰謀策略による「執権職」の確立は数々の争乱を産む。その時、足利家は義兼が北条政子の妹・時子を娶り、北条得宗家の風下に入ることを選択し、家格は上位であるが目立たず、また、危険を感じれば出家、或いは、身を賭して家督は幼少の嫡子に継承していく。その嫡子の血脈は、必ず北条家との血脈が繋がっている。

ここに計算的か偶然的かは、それぞれの考え方に任せるとして、他の「名門御家人家」が次々と歴史の舞台から抹殺されてゆく中で、「足利家」という家名はしぶとく存続していくのです。

ついに尊氏が二十七才で正式に足利家第八代当主を継承していくのです。

足利尊氏の反逆

都では、後醍醐天皇の倒幕活動が顕在化し、元弘元年（1332）八月、大和国笠置山（現：京都府和楽郡笠置町）に倒幕の兵を挙げた。

そこで、九月になって鎌倉幕府の得宗北条高時は、この反乱鎮定のために、大仏貞直・金沢貞冬らと共に、まだ父・貞氏の喪のあけぬ尊氏に討幕軍の大将を命じたのだった。

家督継承後の鎌倉幕府の存亡を担う責任を背負わされる大きな討伐ではあったが、父の弔いも無視する幕府の命令に対しては、尊氏の心中は大きな憤りを感じ、割り切れない複雑な感情であったと思われる。

そのような不満を心に秘めた尊氏であった

が、大仏氏・金沢氏と怒涛の攻めで、わずか二日間で笠置山を陥落させ、後醍醐天皇が企てた二度目の鎌倉幕府討滅を失敗に終わらせてしまう。幕府軍のあつけない勝利となった。

そして、後醍醐天皇の身柄は拘束され、捕縛された後醍醐天皇は、翌、元弘二年（1332）三月に隠岐島に流罪となつて行く。

このスピードある尊氏の活躍には、幕府内で一気にその声望は高まり、六月になって従五位上の位階が叙爵される。

これまでの足利家は、父貞氏の病弱や、兄高義の早逝などあり、なかなか幕府内での存在感は薄れたものだったが、尊氏は家督継承からわずか一年で、一躍、鎌倉幕府の北条得宗家権力の一翼を担う枢要な地位になつて行くのである。

しかし、不屈の闘志と倒幕の執念に熱い後醍醐天皇は、元弘三年（1333）閏二月、隠岐島を脱出し、伯耆国船上山（現：鳥取県東伯軍琴浦町）に、三度目の兵を起す。

これに対し鎌倉幕府の北条高時は再度、同年三月、名越高家らとともに後醍醐天皇討伐の出兵を尊氏に命ずる。さきの笠置山攻略の

時は、父貞氏の服喪中であったが、今度は仮病を使ったのか病に臥せていた。にもかかわらず幕府は一方的に出撃の命令を下した。

この時、尊氏は幕府の命令に従い後醍醐天皇討伐への形をつくり西国に進軍するのですが、その時、母・清子の兄・「上杉憲房」から幕府への反逆を執拗に進言されていたようです。

この上杉家は、鎌倉幕府へ宗尊親王を六代将軍として迎えた時（建長四年＝1252）には、京の中級貴族の「上杉重房」が侍従として下向してきた。その後、宗尊親王が謀反の疑いで京に召喚された時には、上杉重房は同行せず、鎌倉に武士として土着し、足利家三代泰氏の家宰となつていった。この重房の孫筋に当たるのが、謀反の進言をした憲房で、その妹・清子は尊氏の母となるのです。

そして、憲房は、西上中の尊氏に、密かに後醍醐天皇の「北条高時追討の綸旨」を届ける。また、近江国鏡宿（現：滋賀県蒲生郡竜王町）でも、再三にわたり反逆を促したのは細川和氏と上杉重能（憲房の養子。尊氏の従兄弟）であった。

しかし、尊氏には反逆を躊躇させる大きな

壁があつた。それは、正室・登子が北条氏の出身であり、また、嫡子・義詮が生まれ幼かつた。そして、尊氏の西国出兵に際し、得宗北条高時は周到にも、尊氏の妻子を人質として鎌倉に留め置き、さらに幕府に二心(ふたごころ)ない旨の「起請文(きしょうもん)」を提出させている。

しかし、このような反逆を躊躇させる要因はあつたが、尊氏は、鏡宿で上杉憲房から後醍醐天皇の「北条高時追討の綸旨」を拝受し、京都へ同年四月十九日入るのです。

軍を整え、四月二十七日、名越高家軍は山陽道、尊氏軍は山陰道を進撃していったが、名越高家は京都を出立した直後に、後醍醐天皇の腹心・赤松円心に敗れ、戦死してしまう。

一方の尊氏は予定通り山陰道を進み、足利家の所領であつた丹波国篠村荘(現：京都府亀岡市)に陣を敷く。そして、滞在数日の間に、全国の武士に後醍醐天皇の綸旨をもとに、倒幕への協力を呼び掛ける文書を大量に発行するのである。

同年五月二日、尊氏は鎌倉の妻・登子と嫡子・義詮が無事、鎌倉の足利留守居軍により

大蔵谷の足利氏館から脱出した報を受ける。また、篠村で、後醍醐天皇から二通目の綸旨を受領する。

五月七日早朝、尊氏の文書に呼応して続々と篠村に武士団が集まってくる。その武士たちを糾合し、ついに尊氏は京都の六波羅探題を急襲する。幕府軍の六波羅探題は陥落する。

一方の関東では、五月八日。上野国(現：群馬県)で、新田義貞が倒幕の兵を挙げる。その討幕軍は周辺の武士を味方に引き入れ次第に兵力は巨大化していく。

五月十二日は武蔵国の小手指河原(現：埼玉県所沢市)、十三日は久米川(現：東京都東村山市)、十五日には分倍河原(現：東京都府中市)で幕府軍を追い詰め打ち破っていく。

五月二十一日には、鎌倉全体を包囲し、稲村ヶ崎から市中突破し、怒涛の勢いで幕府政庁に迫る。翌五月二十二日、進退きわまつた北条高時以下一族・郎党八百七十余人は、菩提寺の東勝寺で自害して果てる。

尊氏が反逆の狼煙を上げてから、わずかに一ヶ月。ここに鎌倉幕府は瓦解し滅亡していくのです。

後醍醐天皇は鎌倉幕府の六波羅探題陥落⁶の報に接するや、元弘三年(1333)六月五日、伯耆船上山から上洛し、いよいよ「建武の新政」に着手するのです。

足利尊氏の征夷大將軍

鎌倉幕府倒幕の最大功労者としての尊氏は、後醍醐天皇より内昇殿を許され、鎮守府將軍にも叙任されます。さらに同月十二日には、尊氏は従四位下・佐兵衛督(さひょうえのかみ)に叙任し、また、弟直義も左馬頭に任じている。

八月五日には、それまでは北条高時の「高」の字をもらい「高氏」と名乗っていたが、後醍醐天皇は、自身の実名である「尊治」の「尊」の字を与え、名を「尊氏」と改めさせ、さらに「従三位」の位とともに、これまで北条氏が独占してきた武蔵守の名職までも与えられるのです。

尊氏が篤く帰依し、数々の大寺の住持とその素晴らしい庭園を作庭した禅僧、「夢窓疎石」は、尊氏の人的魅力について、「お心が広く、物惜しみする様子がなく、金銀すらも、

まるで土石のようにお考えで、武具や馬などを人々に下げ渡すときも、財宝とそれを与える人とを、とくに確認するでもなく、手にふれるに任せてお与えになってしまふ」と評している。

五月七日、六波羅探題陥落以降の尊氏の行動は、京都に「奉行所」を設置し、倒幕に呼応して全国から続々と馳せ上ってくる武士たちが提出する「着到状(ちやくとうじょう)」を受理し、「これに「証判(しょうばん)」を据える作業を精力的におこなっている。

この活動が、鎌倉幕府に代わる次の幕府をひらくための独断専行と、後醍醐天皇は考えたかもしれない。このような行為に後醍醐天皇は警戒感を強め、武家の棟梁である尊氏がこれ以上の力をつけることを拒み、政権の要職には一切関与させないことにしていく。

五月三十日、尊氏は腹心の細川和氏・頼春・師氏の三兄弟を鎌倉に派遣し、鎌倉を占領し居座り続けている新田義貞に、鎌倉を足利に明け渡させることにしたのである。

また、九州では鎌倉幕府の鎮西探題が五月二十五日に陥落している。そして、尊氏は四

月二十九日付けで、大友貞宗・島津貞久など有力守護宛に「綸旨」をもとに、鎮西警護の指示を出し、九州に於ける尊氏の存在感を手抜きなく行っているのです。

あらたな幕府を開く野心家の後醍醐天皇の政権内では「侍大将に」として忠勤に励もうとしているのですが、地方から参集してきた多くの武士たちは、都で尊氏の豪放な人格に魅了され、新たな指導者として心酔し、尊氏を建武政権の要として持ち上げていくのです。

これに苛立ちを顕わにしていたのが、「護良親王」でした。討幕運動を初期から支えてきたにもかかわらず、政権内で相応の地位を与えられず、その不満の矛先は、尊氏に向けられていた。

建武元年(1334)三月と六月の二度にわたり、新田義貞・楠木正成・名和長年を巻き込み、尊氏暗殺計画を実行している。幸いに尊氏は、これを撃退しているが、この事件には、後醍醐天皇の「叡慮(えいりょ)」(後醍醐天皇の意志)ではないかと察知し、尊氏は後醍醐天皇に対し猛烈な抗議を行ったが、後醍醐天皇は「まったく叡慮にはあらず」と弁解し、護良

親王を切り捨てる態度にでてしまいます。 17

十月、護良親王は謀反の罪で捕縛され、翌月、その身柄は鎌倉府を預かる弟直義のもとに送致されてしまふ。鎌倉幕府滅亡後も全国各地では建武政権に対しての抵抗集団が下火ではあるが燦っていた。

しかし、建武二年(1335)七月、北条高時の遺児・「北条時行」は信濃に潜伏していたが、諏訪氏ら信濃武士の協力で蜂起し、またたき間に鎌倉を奪還してしまふ。

成良親王を奉じて鎌倉府を守っていた直義は多くの一族を失い、鎌倉から敗走した。鎌倉陥落の報に接した尊氏は、弟直義を救援のための出陣を後醍醐天皇に申し出る。しかし、後醍醐天皇は、これを許さなかったが為に、尊氏は、憤然として八月二日、無断で鎌倉救援に出発してしまふ。驚いた後醍醐天皇は、尊氏を「征東將軍」に任じ、尊氏の行動を追認するのです。

三河国(現：愛知県東部)で直義と合流。またたく間に鎌倉を奪還してしまふ。「北条時行」の行動は二十数日で壊滅してしまふ。

鎌倉奪還後の尊氏は、そのまま鎌倉にとど

まり、配下の武士や寺社に、尊氏独自の恩賞を分け与えはじめてしまう。しかし、これを知った後醍醐天皇は、「仲院具光」を使者に立て、「**軍兵の恩賞は、天皇の綸旨で下し与える。とにかく早々に帰洛せよ**」と即時に帰京するよう促している。

そして、尊氏に上洛の意志がないことを確認した後醍醐天皇は、十一月十九日新田義貞を尊氏討伐に発進させるのです。尊氏にとっては、後醍醐天皇の尊氏討伐の知らせは、大きなショックであり、足利家伝来の**精神の混乱**に陥ってしまう。政務を弟直義に一切譲り、自らは、わずかの近臣を連れ、鎌倉の「**浄光明寺**」に引き籠ってしまふのです。

そのような情勢の中、討伐軍は、十一月二十五日には足利軍の守る所領の三河国を破り、十二月五日には出陣した直義軍も撃破され、箱根山を突破されれば鎌倉は落ちたも同然になるので、直義は箱根山を死守することに決めた。

尊氏は、ここで「直義の命は、自分の命」と悟り、十二月八日、浄光明寺を出て、二千騎を引き連れ、箱根に陣を引く直義の救援に向か

うのです。同十日の箱根竹ノ下での合戦での勝利を皮切りに、尊氏の絶大な豪放磊落に率いられた足利軍は、壊滅寸前から、わずか数日で持ち直し新田軍を追い詰め、ついに建武三年(1336)正月十一日、尊氏兄弟は、後醍醐天皇を比叡山に追い詰め、京都を手中に治めたのです。尊氏三十一才の時である、

しかし、京都を制圧してつかの間、奥州から西上してきた後醍醐天皇の援軍「北畠顕家」軍により、正月二十七日、尊氏は京都を追われ、九州をめざし落ちのびて行くのです。落ちのびてゆく途上、尊氏兄弟は、建武政権とは決別し、尊氏の「**味方についた者には、建武政権に没収された所領の返還を約束する**」文章をばら撒くのです。そして、この尊氏の施策に賛同する武士達は、続々と尊氏のもとに馳せ参じてくるのです。

九州に上陸した尊氏は、三月二日、筑前国多々良浜(現：福岡県福岡市)の戦いで菊地武敏を破り、一ヶ月の間に九州の武士を味方につけることに成功する。

四月二日には、準備万端、博多より都をめざし東上を開始。五月二十五日、摂津国湊川

(現：兵庫県神戸市)において楠木正成を壊滅⁸し、戦死させる。六月十四日、尊氏は光厳上皇を奉じて入京、ついには再び京都を制圧していくのです。そして、八月十五日、あらたな天皇として「**光明天皇**」が践祚します。

比叡山に立て籠った後醍醐天皇は、十月、忠臣の名和長年が戦死し、戦力の低下で、尊氏の軍門に下った。十一月二日には、後醍醐天皇から光明天皇に、天皇家の「三種の神器」が円満に譲渡され、足利尊氏軍の正統性は盤石なものとなったのです。

「三種の神器」が譲渡されてから、五日後の建武三年(1336)十一月七日、足利尊氏は、二項十七ヶ条からなる法典「**建武式目**」を制定し、ここから二年後の暦応元年(1338)八月には、光明天皇から「**征夷大將軍**」に任じられ、名実ともに、ここに室町幕府が成立していくこととなるのです。

完

令和六年十一月二十日

鎌倉楽しむ会 企画責任者

清藤 孝 編

参考文献

- | | | |
|----------------|--------|----------|
| 日本史年号・年表ハンドブック | 阿部 猛 編 | 同成社 |
| 中世足利氏の血統と権威 | 谷口雄太 | 吉川弘文館 |
| 足利尊氏と関東 | 清水克行 | 吉川弘文館 |
| 北条氏と三浦氏 | 高橋秀樹 | 吉川弘文館 |
| 鎌倉の寺 小事典 | | かまくら春秋社 |
| 日本史辞典 | | 角川学芸出版 |
| 陰謀の日本 | 呉座勇一 | 角川新書 |
| 一冊でつかむ日本中世史 | 武光 誠 | 平凡社 |
| 本当は面白い日本中世史 | 八幡和郎 | ソフトバンク新書 |
| 武士の時代 | 本郷和人 | 祥伝社新書 |
| 鎌倉文化観光検定公式テキスト | 監修 | 鎌倉商工会議所 |